

高 等 学 校

平成 2 3 年度

教育研究員研究報告書

芸 術 （美術）

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究の仮説	3
IV	研究の方法	3
V	研究の内容	5
VI	研究の成果	23
VII	今後の課題	23

研究主題	「生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるための授業の在り方」 主体的に創造活動に取り組むための鑑賞の指導法の工夫
------	---

I 研究主題設定の理由

1 学習指導要領の改訂

平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申を受け、高等学校学習指導要領が改訂された。その解説芸術編において、芸術科の改善の基本方針として、「課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する」ことが示され、美術Ⅰ及びⅡの目標にも、『生涯にわたり』という文言が加わり、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てることが明確にされた。

また、基本方針では「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する」「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する」こととしており、芸術科の目標に「芸術文化についての理解を深め」ることが新たに加わり、鑑賞指導の充実の重要性が示された。さらに、「作品について、互いに評価し合う活動を鑑賞指導に取り入れるようにし、言語活動の充実を図る」ことも示されている。

これまでの美術の授業では、ともすれば絵画や彫刻など表現活動に時間を充て、提出された作品だけで評価を行っていた面があった。自我が確立され、自己の美意識や価値観が形成される高校生の時期は、表面的な技術の巧拙のみを重視するのではなく、自己の内面を掘り下げながら主体的に創造活動に取り組ませることが重要である。そのためには、学習指導要領に示されたように、鑑賞の授業を意図的・計画的に実施して、美術文化について生徒が意味や価値を見付け、感じ取り、考える活動を行い、鑑賞の授業を充実させる必要がある。

2 現状と課題

高校での美術の授業は、音楽、美術、工芸、書道の各科目からの選択となり、美術の授業は美術を選択した生徒のみが受講をしている。生徒一人一人が自分の好きな科目を選択できてよいと思われがちであるが、現状は必ずしもそうではなく、選択者の半数以上が消去法による選択をしている。

それら数多くの生徒たちの課題として、美的体験や基礎的な知識が不足していることが挙げられる。この色とあの色を混ぜるとこんなにきれいな色ができた、というような体験が少なく、美しいものやよりよいものにあこがれ、それを求めていこうとする意欲や関心が不足している。現代の高校生は、精神的に大きく成長する過程において、溢れるほどの映像やデザインされた商品に囲まれている。しかし、芸術との触れ合いという点では、自分の嗜好にあった狭いジャンルの芸術作品にしか触れておらず、美術に対する知的好奇心をもって、授業に取り組んでいる生徒は少ない。

このような芸術作品との触れ合いの少なさなどが、美術に対する興味・関心の低さとなり、主体的に創造活動に取り組む姿勢に欠ける一因となっている。美術の授業に対しての意欲の低さや少しでも良い作品を作ろうと思う向上心の無さが作品の出来栄とともに達成感の低さにもつながり、次の課題に向かうモチベーションを下げるという負のスパイラルを生んでいることが多い。

生徒一人一人がそれぞれの興味・関心や個性を生かして美術と幅広く、かつ主体的に関わっていく姿勢を育むためには、様々な美術作品に触れさせ、見方や感じ方を身に付けさせることが大切である。作品がどのようにしてできあがっていくのか、どのような時代背景の下で制作されたのかなどを理解することが、多様な観点から美術に対して主体的に関わりをもとうとする態度を育むことにつながる。できれば本物の作品を見たり触れたりすることによってその場で感じる体験があれば、生徒の感性はより深まり、積極的に創作活動に取り組むことができる。そのためにも鑑賞の授業を充実させることが求められる。

3 主題設定の理由

美術に対する生徒の意欲を高め、作品制作へのモチベーションを上げるためには、鑑賞の指導を通して、思考・判断・表現力を育むことが重要であると本部会では考えた。

高校で美術を学習する目標は、必ずしも写實的に描ければよいということではない。また、在学中に傑作を制作させることでもない。卒業後も生涯にわたって美術を愛好する心情を育てること、感性を高めること、美術に関わる様々な能力を伸ばすこと、芸術文化の理解を深めることなどが相互に作用して、豊かな情操を養っていくことにある。また、個々の生徒の美術に対する捉え方や考え方を深化させたり、生徒のもっている芸術的な価値意識を一層拡大したり、新たな価値を見いださせたりしていくことである。

そこで、日本及び諸外国の多くのジャンルの、古典からコンテンポラリーアートまで多種多様な芸術作品に触れさせ、生徒の表現の可能性を広げることが重要となる。鑑賞も創造活動の一環であり、生徒が対象に対し能動的に接し、感性を豊かに働かせて、作品などに対する自分としての意味や価値をつくりださせる必要がある。そのためには、新たな視点で作品を捉え直したり、他の作品と比較して相違や共通性に気付いたりするなど生徒が関心をもって具体的によさや美しさを感じ取れるような鑑賞の指導が求められる。

以上のことから、本部会では「生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるための授業の在り方 ～主体的に創造活動に取り組むための鑑賞の指導法の工夫～」を研究主題とした。

Ⅱ 研究の視点

1 美術科における思考力・判断力・表現力

今年度の研究員の全体テーマである「新学習指導要領に対応した授業の在り方について」を受けた高校部会テーマは、「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業展開についての実践研究」である。学校教育法 30 条第 2 項に明記された学力の三要素のうち、知識・技能を活用して課題解決を図る思考力・判断力・表現力をいかに育てるかということがテーマとされた。

そこで本部会では、まず、三つの能力について検討し、次のように定義した。

- 思考力について：主に作品の構想段階において与えられたテーマを理解し、自分の作品を構想したり、他者の作品を鑑賞して、その意図を理解したりする力
- 判断力について：作品制作の過程において、完成に至るまでに、どのような方法、技術、素材を用いれば自分の抱く完成イメージに近づくのかを見極め、それらを選択する力
- 表現力について：作品を介して、自己の感覚や感情、思考など内在するものを外在するものとして他者に伝える力

2 思考力・判断力・表現力の現状

上記の学力観から生徒の現状を見たとき、次のような課題が見いだされる。

- 教科書や他の作品の模写や一部を真似て作品を構成する傾向があり、独創的な作品を発想することができない生徒が見られる。
- 自分がイメージする作品に仕上げるために、的確な形や色を判断することができない生徒が見られる。
- よさや美しさについて、新たな価値を見いだしたり、自分のもっている価値意識を他者に伝えたりすることが苦手な生徒が見られる。

これらの現状を踏まえ、鑑賞の指導を通して、美術への永続的な愛好心を育てていくための指導法について検証授業を行う。指導に当たっては、造形的な視点を豊かにもって対象を捉えるために言葉で考えさせ、表現させることも大切である。よさや美しさについて具体的な言葉で表現し、言葉を使って意見を交換することで自他の見方や感じ方の違いを理解することが自分の見方や考え方を広げ、作品への理解を深められると考えられる。

Ⅲ 研究の仮説

主題の中にある、「生涯にわたり美術を愛好する心情」は、生徒が主体的に創造活動を行い、豊かな美的体験を積むことによって育まれると本部会において考えた。

美術では、表現力と鑑賞力が密接につながったものであることから、表現と関連付けた鑑賞の指導を充実させることによって、美的体験が豊かになり、意欲や関心が高まるとともに知識が深まり、思考力・判断力・表現力が育まれ、主体的に創造活動に取り組むことができるという仮説を立てた。創造することの楽しさや達成感を味わうことが、生涯にわたって美術を愛好する力を育てる牽引役を担うのではないかと考察した。

そして、生徒の現状と課題を考えるのと同時に、今まで自分たちの行ってきた表現と鑑賞の授業への取組を省みながら、更に美的体験を豊かにすることのできる効果的な鑑賞の指導法についてその具体的方策を考え、研究授業において検証することとした。

Ⅳ 研究の方法

1 研究の方法

主題に即して、高等学校学習指導要領の美術Ⅰから美術Ⅲまでの鑑賞活動に示された以下の

(1)から(4)までの内容について、実践的な指導法について研究を行う。

- (1)作者の主張、作品と時代や社会との関わりなどを考察し、自己の価値観や美意識を働かせて、作品を読み取り味わう

作品の鑑賞において、生徒は美的体験が乏しいために「よさ」や「美しさ」とは何か、具体的な基準のないまま表面的な理解で完結している場合が多い。生徒が作品や作者についてより深い関心を持ち、自己の価値観や美意識を働かせて読み取り味わうことができるよう、表現意図、技法、時代背景など様々な面から作品についての指導を行う。また、言語活動を重視し、作品の特徴を分析させたり、他の作品と比較検討させたりするなどした結果をまとめることで、作品に対する見方や感じ方への理解を深めさせる。

- (2)映像メディア表現の特質や表現の効果などを感じ取り、理解する

現在、映像メディア表現は美術における表現分野の一つとして、世界的に認知されており、光や音、空間表現、時間の流れなどの組合せによって多様な表現の優れた作品が制作されている。映像メディア作品を鑑賞させることによって、従来の美術作品には無かった幅広い、豊かな美的体験をさせるとともに、写実性、時間性、物語性などの造形性や芸術性を自己の作品制作と関連付け、制作の意欲を高めさせる。

- (3)美術と社会や生活の関連を見だし、心豊かな生き方の創造に関わる美術の働きについて理解を深める

美術を学ぶことが、生活や人生において何の役に立つのかという疑問を感じる生徒は少なくない。しかし、純粋な美術作品だけでなく、身近な日常生活の中にも美術的造形が活用されており、それらが我々の生活や社会を彩り、豊かにしている。生活の中にある美術作品及び美術的要素を含む造形を意識的に観察し、制作に活用させることで生活及び社会と美術の関連を見だし、より主体的に美術に取り組む姿勢を身に付けさせるとともに、美しさや機能など新たな価値を生み出し、生活や社会を豊かにする美術の働きに理解を深めさせる。

- (4)日本の美術の歴史や表現の特質、日本及び諸外国の美術文化について理解を深める

日本の美術は歴史の中で多くの異文化と触れながら発展し、独自の美意識や自然観、創造的精神をもっているが、美的体験の乏しい生徒にとっては理解が難しい面がある。表現技法のみならず、民族や信仰、時代等の観点をも含めて諸外国の作品と比較検討させることで、我が国独自の美術表現をより深く理解させる。

2 研究の検証

研究主題の検証方法は、美的感覚や価値観の高まりについて、生徒へのアンケート、ワークシート、自己・他者評価等から生徒の変容等を確認・評価することを通じて行う。また、鑑賞の指導を行なう前、鑑賞中、鑑賞後の表現等の違いについては、授業中の生徒の活動の様子や作品などから評価検証を行なっていく。そして、評価結果から思考力・判断力・表現力の育成がどの程度図られたかを検証する。

V 研究の内容

1 研究構想

全体テーマ 新学習指導要領に対応した授業の在り方について

高校部会テーマ 思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力 ○与えられたテーマを理解し、自分の作品を構想したり、他者の作品を鑑賞し、その意図を理解したりする力

判断力 ○課題実現のための方法や技術、素材を選択し工夫する力

表現力 ○自己の感覚や感情、思考など内在するものを外在するものとして他者に伝える力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現 状 ・美的体験や知識の不足により、主体的に創造活動に取り組むことができず、創造することの楽しさや達成感を十分に感じることでできない生徒が多い。

課 題 ・美術に対する意欲や関心、知識を高めさせるための授業展開の工夫が必要である。

高校(芸術・美術)部会主題

生涯にわたり美術を愛好する心情を育てるための授業の在り方

主体的に創造活動に取り組むための鑑賞の指導法の工夫

仮 説

- ・ 表現と関連付けた鑑賞の指導を十分確保することによって、美的体験が豊かになるとともに、意欲や関心、知識が高まり、主体的に創造活動に取り組むことができる。また、それにより創造することの楽しさや達成感を感じることができ、ひいては生涯にわたって美術を愛好する心情を育てることにつながっていく。

具体的方策

- ・ 作品や作者に関心をもって、そのよさや美しさを感じ取り、その特徴を捉えて分析するなどして、作品に対する見方や感じ方への理解を深める。
- ・ 多様な映像メディア表現に触れることによって、美的体験の幅を広げる。
- ・ 身近にある造形や美術を観察することによって生活及び社会と美術の関連を見いだす。
- ・ 日本と諸外国の作品を比較検討し、我が国の伝統的な美の表現に対する関心を高める。

検証方法

- ・ 美的感覚や価値観の高まりについて、アンケートを実施して評価・検証する。
- ・ 鑑賞の指導を行う前の表現と行った後の表現の違いについて評価・検証する。

2 実践事例Ⅰ

科目名	美術Ⅲ	学年	3 学年
-----	-----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 題材名 「ハードカバーの本の制作」
 イ 使用教材 教科書「高校美術 3」日本文教出版

(2) 題材の指導目標

- ・ 「本」の様式に対応した独自の美術表現を試みる。
- ・ 鑑賞を通して「本」の表現媒体に対する関心を高め、既成の書物に多く触れて美術文化に関する理解を深める。

(3) 評価規準

観点 評価	ア 美術への 関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	美術の創造活動の喜びを味わい、多様な表現に関心をもち、主体的に制作に取り組もうとしている。	感性を働かせて主題を生成し、独創的な物を作ろうと工夫し、構想している。	作品を工夫しながら、「本」の正しい体裁を備えている。	他者の作品の表現の工夫などの理解を深め、自己の価値観や美意識を働かせて、その良さ美しさを創造的に味わっている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①制作に意欲的に取り組んでいる。 ②制作の段取りを主体的に考え、技法や材料を創意工夫している。	①既製品にはない着想をしようとしている。 ②全体のコンセプト、表紙、ストーリー、その他に独創的な表現の構想を練っている。	①ハードカバーの構造を正しく理解し、正確に作っている。 ②本ならではの表現を理解し、工夫している。	①作者の主張、時代や社会との関わりを理解している。 ②作品を評価し、そのよさや美しさを客観的に表現しようとしている。

(4) 単元（題材）の指導計画と評価計画（18 時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
第 1・2 時	・ 作品の鑑賞 ・ 「本」の表現様式の理解	・ 参考作品を見て感想を述べる。 ・ 独創的なイメージをもつ。 ・ わら半紙をステープラで綴じた簡単な構造のひな形を試作する。 ・ アイデアスケッチをする。	エ②（発言） イ①、ウ②（試作品）
第 3・4 時	・ 「本」の表現様式の理解	・ アイデアスケッチを重ねてひな形を完成させ、本の規	ウ①②（作品）

		模を決定する。 ・画用紙で支持体を作る。	
第5・6時	・「本」の表現様式の理解	・本のページの展開を理解し作品を調整する。 ・支持体（画用紙を糸で綴じて作った本）に描き始める。	ウ②（作品）
第7・8時	・「本」の構造の理解	・ハードカバーを制作し、装着する。	ア②、ウ①（作品）
第9・10時	・「本」の内容の制作	・イメージに近づくよう、工夫し表現する。	ア①（観察） イ②（作品）
第11・12時 （本時）	・絵本の鑑賞 ・作品制作	・プロジェクターの画面、図版、あるいは手にとって絵本を鑑賞する。 ・名作絵本を鑑賞し、本という表現媒体を学び直す。 ・世界各国の文化を学ぶ。 ・ワークシートに記入する。 ・イメージを膨らませ、制作を続ける。	エ①（発言） エ②（ワークシート） ア①（観察）
第13～18時	・作品制作 ・ブックデザインの学習	・内容を制作する。 ・表紙、背表紙、中表紙、奥付等、ページ以外の本の構成要素のデザインをする。	イ②、ウ②（作品）

(5) 本時（全18時間中の11・12時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 絵巻物を鑑賞し、日本の美術文化の理解を深める。
- (イ) 世界各国の絵本を見ることで民族性や表現の違いに気付く。
- (ウ) 既製の絵本に多く触れることにより、制作中の自らの作品を客観的に再評価し、工夫を重ねたり、よりよい表現へと向かったりする動機をもつ。

イ 本時の展開

段階	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入①	5分	・西洋絵画の鑑賞 「モナ・リザ」 （レオナルド・ダ・ヴィンチ）	・美術への興味・関心を高めるため、導入時に鑑賞の時間を設ける。	エ①②（ワークシート）
導入②	5分	・前回までの作品を振り返ってこれからの作業を確認し、本時の学習内容を理解する。	・各自の進度に気付かせる。 ・鑑賞の姿勢に入らせる。	
展開①	40分	・絵本の鑑賞 ①「絵巻物」 ②ストーリー展開においてページをめくることが効果的な本 ③民族性・国民性のあるもの ④名作とされる絵本	・日本の絵巻物を見せ、そのストーリー性や表現を鑑賞させる。 ・作品のナショナル리티に留意させる。 ・名作とされる既成の絵本の様々な工夫や独創性に気付	ア①（観察）

		⑤飛び出す絵本 *以上の条件で準備するもの ・信貴山縁起絵巻（図版） ・安野光雅「旅の絵本」 ・シェル・シム・アスタイン「ぼくを探しに」 ・ディック・ブルーナ「うさこちゃん」 ・谷内こうた「かぜのふくひは」他3冊 ・モリス・センダック「怪獣たちのいるところ」 ・ロシア民話「てぶくろ」 ・ジェラルド・マクダーモット「太陽へ飛ぶ矢」 ・A・ラマチャンドラン「まるのうた」 ・マーティン・ハント・フォート「ウォーリーをさがせ」 ・エリック・カール「はらぺこあおむし」 ・ルイス・キャロル「不思議の国のアリス」 ・ワークシート記入	させる。 ・スライドショーでや書画カメラで映したり、実際に手にとらせて見せたりするなど、その教材にふさわしい効果的な見せ方で鑑賞の時間を展開する。 ・感想を言葉にできるようにする。	エ②（ワークシート）
展開②	40分	・各自の作品制作	・指導内容・見たものを自分の作品に生かせるようにする。	ア①（観察）
まとめ	5分	・作業の進んだ生徒、発想の豊かな生徒の途中作品を紹介する。	・互いに評価し合う姿勢をもたせる。	エ②（発言）

(6) 本時の振り返り

ア 「信貴山縁起絵巻」は、巻物という様式を体感させるために、コピーした図版を長く貼り合わせて巻物を作って見せた。書画カメラの下で実際に巻物を繰って見せたが、画質が悪く鑑賞しづらくなってしまった。しかし「面白い」という声も聞かれるなど日本の古典の絵巻物様式を印象付けることができた。

イ 世界各国の民族性・国民性がイメージで感じ取れるよう、ロシア、アメリカインディアン及びインドの作者による絵本を準備した。それぞれ十分な授業時間を割いて指導する価値のあるテーマであるが、短時間で触れるだけになってしまったことが残念である。

ウ 多くの本を飽きさせず短時間で見せるために、ワークシートはごく簡単な「一言コメント」の形式にした。本校の生徒にとっては負担なく感想を言葉にできて良かったが、じっくり考える機会を与えることができなかった。

エ 本時の鑑賞は主にICTパソコンとプロジェクターを活用して進めた。絵本を読み聞かせる感覚でスライドショーを使うのは適切で、生徒にとって鑑賞しやすいよい方法だった。

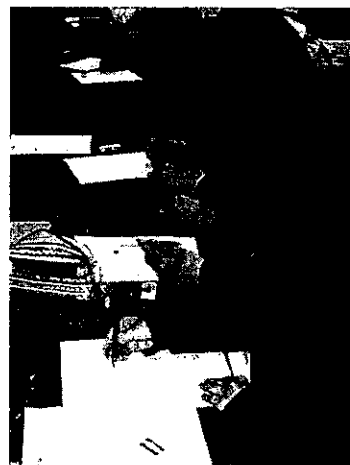
参考資料

<授業の様子>

① プロジェクターを見ながらワークシートに記入する生徒たち

- ・「巻物は昔の絵本だということに驚いた。」
- ・「絵本によってはページによって絵の大きさを変えるなど工夫していてすごいと思った。」
- ・「巻物は時間が流れていて面白いと思った。」
- ・「子供の頃と今では同じ絵本を見ても感じ方が違っていった。」

などの記述が見られた。



② ICTパソコンとプロジェクターで見た後、実際に絵本を手にとって見る生徒たち



特にプロジェクターでは体感できない仕掛け絵本や、視覚障害者の子供が触る絵本は、好評であった。

「本」という媒体は手に取って見られることを前提に表現されているため、画像では伝わらない感触に特徴のある作品も多数ある。このように手に取って見る時間帯も必要である。

<授業後のアンケートから>

- ・毎回行っている西洋美術鑑賞の時間をどう思いますか？

とても面白い	まあまあ面白い	つまらない
17%	75%	8%

- ・本日の絵本を鑑賞する授業はどうでしたか？

とても面白い	まあまあ面白い	つまらない
67%	33%	0%

身近な鑑賞材料だったためか、平常の鑑賞の時間より高い興味関心をもって授業に参加していたことがアンケートからもうかがうことができる。

鑑賞からヒントを得て、自らの作品に生かそうするなど、その後、積極的に制作に取り組む姿勢が見られた。



3 実践事例Ⅱ

科目名	美術Ⅰ	学年	1 学年
-----	-----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 「エッチング ～凹版画による心の世界の表現～」

イ 使用教材 「高校美術Ⅰ」 日本文教出版

「岸辺のふたり」 マイケル・デュドク・デウ・ヴィット作

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 心の世界の表現という抽象的なテーマの中に、自分の身体の一部を必ず絵に入れるという制約をし、発想し構想する能力を身に付けさせる。
- ・ エッチング技法の特徴であるモノトーンによる表現や、線による描写などを理解させる。
- ・ 鑑賞の活動を通して、映像作品の中から美しいと感じる場面を描き出し、自己の作品に反映させる。

(3) 評価規準

観点 評価	ア 美術への 関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	制作作業の工程を理解し、集中して課題の制作に取り組んでいる。	心の表現というテーマを自分なりに解釈し、表現している。	鉛筆やニードルを活用し、画面の隅々まで意図をもって制作している。	他者の作品のよい所や、表現の工夫を学ぼうとしている。
学習活動 に即した 具体的な 評価規準	①題材を通して積極的に取り組んでいる。 ②刷りの工程で作品の濃淡がきれいに出るまで、何枚も作品を印刷している。	①自分のイメージを具現化している。 ②身体の一部を絵の中に効果的に取り入れている。	①白から黒までの濃淡が幅広く表現されている。 ②線描に幅をもたせるとともに、描写するポイントにおいては、細部まで描いている。	①作品を鑑賞して感じたよい所や、作者の意図などを捉え、言語化している。 ②他者の作品からヒントを得て、自分の表現に取り入れている。

(4) 単元（題材）の指導計画(14 時間扱い)

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
第 1・2 時	・課題の理解と作品の構想	・原画の下絵となるラフスケッチを行う。	ア①(観察) イ①(アイデアスケッチ)
第 3・4 時 (本時)	・映像作品の鑑賞と作品の構想	・鑑賞活動で学んだことをワークシートに記入する。 ・ラフスケッチの続きを行う。	ア①(観察) イ①(アイデアスケッチ) エ①②(ワークシ

			ート)
第5・6時	・原画の完成	・ラフスケッチをもとに、画用紙に鉛筆で原画を描き、完成したものを提出する。	ア①(観察) イ②(原画) ウ①②(原画)
第7・8時	・銅版への転写	・トレーシングペーパーに原画を書き写し、さらにカーボン紙を用いて銅版に転写する。	ア①(観察)
第9・10時	・銅版への描画	・銅版に写した絵を、ニードルで彫りながら描いていく。	ア①(観察)
第11・12時	・腐食から印刷までの工程	・彫り終えた銅版を腐食液の中にいれ、腐食させる。 ・銅版にローラーでインクを詰め、プレス機で作品を刷る。	ア①(観察) イ①(作品)
第13・14時	・本刷りと作品提出 ・相互批評	・本刷り用版画和紙に作品を刷る。 ・完成した作品を鑑賞し、ワークシートに記入する。	ア②(観察) エ①②(ワークシート)

(5) 本時（全14時間中の第3・4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 作品を鑑賞し、言語化させることで、自分の心の世界を表現するきっかけを作らせる。
- (イ) ワークシートを活用し、アイデアスケッチを考えることで、構想する力を伸ばす。
- (ウ) 対話を通して一人一人の作品のよい部分を引き出し、次時から原画制作に取り掛かれるようにする。

イ 本時の展開

段階	時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	10分	・本時の学習内容の理解	・これから鑑賞する作品とアイデアスケッチの関連について理解させる。	
展開①	20分	・「岸辺のふたり」鑑賞 ・1回目の鑑賞後、ワークシート記入。	・最初はワークシートを配布せずに、鑑賞させる。主人公の心境になって考えてみるような言葉掛けをする。 ・ワークシートに書かれている質問に答えながら、徐々に自分の内面世界について言語化させ、アイデアスケッチを描く手がかりとさせる。	エー① (ワークシート)
展開②	20分	・「岸辺のふたり」2回目の鑑賞 ・ワークシートの質問に答え、	・2回目は鑑賞しながら、主人公の心理がよく現れている場面を絵で描かせるため、2分の1倍速で行う。 ・2回目の鑑賞を通して、場面	エー② (ワークシート) アー①

		アイデアスケッチ用紙1に主人公の心境がよく現れていると思うシーンを四つ描き込む。	ごとの描写がどのように主人公の心理を表しているのかを考えさせ、自分の内面世界を描く時の参考にさせていく。	(ワークシート・アイデアスケッチ)
展開③	40分	- ワークシートに自分の心理について言語化し、それをアイデアスケッチ用紙2に描いていく。 - 前回の授業で行ったアイデアスケッチを受け取り、今まで描いたアイデアスケッチの中から、一番よいと思うものを、原画構想用紙に描いていく。	- 一枚できたら終わりではなく、何枚か描かせる。 - アイデアスケッチの段階でのポイント ①自分の身体の一部を画面上にどのように取り入れるか。 ②白から黒までの諧調の幅をどう描き分けるか。 ③描写すべきポイント以上について特に留意させる。 - 構想段階でのポイントに留意しながらアイデアを考えさせる。 - なかなかラフスケッチが描けない生徒については、声掛けをし、自分の表現が明確になるように助言する。	アー① (ワークシート) アー① イー① (観察)
まとめ	10分	- 本日の授業の振り返りを記入し、鑑賞と表現の効果について意見を述べる。 - 自分の進捗を確認し、次週何を行うかを理解する。	- 美術作品の中には、様々な表現があることを理解させ、色々なものに興味関心をもつよう助言する。 - 次週が原画提出であるということを伝え、制作の進捗について確認するよう注意喚起する。 - 美術室を作業前の状態に復帰させ、着席させた後、静かになったところで授業を終わらせる。	アー① イー①(観察)

(6) 本時の振り返り

ア 短編のモノクロアニメーション作品を1回目は特に説明を与えず、先入観をもたせずに鑑賞させ、2回目は、2分の1倍速で音声消して作品を鑑賞させた。その結果、よりアニメーションが一枚一枚の絵の集積による作品だということに意識が向けられ、名画を模写するときのように、目の前を流れる一枚の絵を食い入るように見つめ、スケッチに集中することができた。

イ 「岸辺のふたり」を鑑賞し、生徒は様々な線描や、白から黒までの濃淡の表現が学習できたが、そのような技法を、自己の心の世界の表現に反映させようとした時に、もう少し時間を取り構想段階においてコマ送りで投影させておくなど、指導上の工夫が必要であると感じた。

ウ 映像を見ながらスケッチを行うことにより、一つ一つの場面がより潜在意識に強く印象付けられた。そのことにより、その後の授業でも、アドバイスを与えた時に生徒はすんなりと理解できるようになった。

参考資料

＜「岸边のふたり」を鑑賞したことによる影響についての生徒の感想＞

- ・ 色の濃さや、遠近の表現の仕方を学ぶことができた。
- ・ 絵のタッチで心情を表現することができた。
- ・ 自分にこれまでなかった表現の仕方があった。
- ・ 明暗の対比で強調したいものを表現するということ。
- ・ モノトーンなので、音声が無い何枚かの絵のようだった。など

＜ある生徒の事例＞

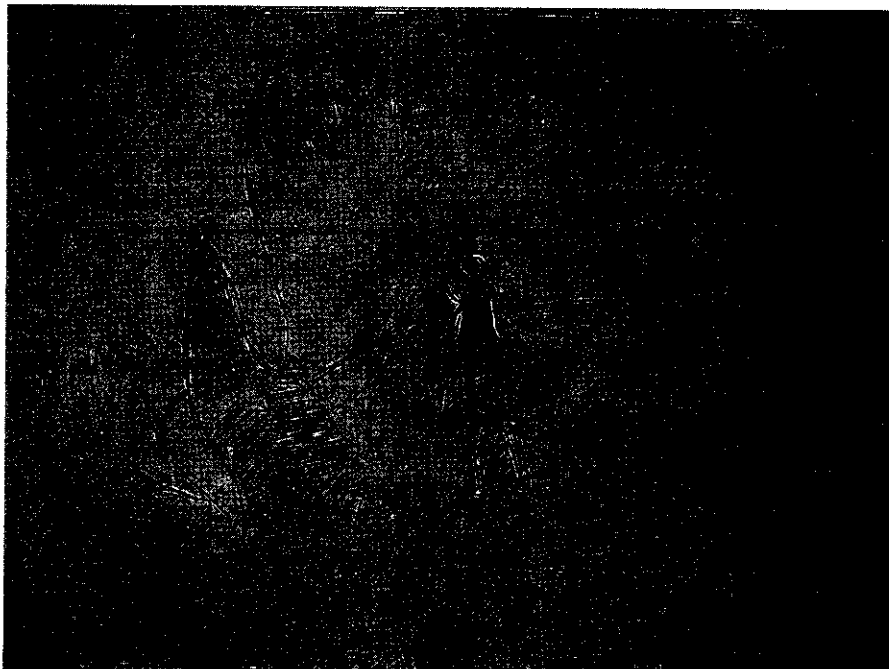
「岸边のふたり」鑑賞以前
左右シンメトリーで広がりがない



鑑賞中のワークシート
主人公の心境が現れている場面描写



鑑賞後のアイデアスケッチ 空想世界に自分を演出し、広がりのある絵になった



4 実践事例Ⅲ

科目名	美術Ⅱ	学年	2 学年
-----	-----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 「建築デッサン」

イ 使用教材 「高校美術 2」 日本文教出版

(2) 単元（題材）の指導目標

- ・ 建築物を、構造や空間を把握して表現させる。
- ・ 絵画で表現された建築や、現代社会で使われる建築の平面表現（建築パース）について学ぶことで、社会や生活における美術の役割について理解を深めさせる。
- ・ 鑑賞活動を通して題材への理解を深めさせ、創造活動に積極的に取り組ませる。

(3) 評価規準

観点 評価	ア 美術への 関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	表現活動に意欲的に集中して取り組もうとする。	設定したテーマを表現するためのイメージを構築している。	構図、鉛筆の使い方、形体を工夫して表現している。	建築表現の美しさや、社会における有用性を理解している。
学習活動 に即した 具体的な 評価規準	表現する内容に応じてデッサンの描き込みや修正をするなど、意欲的に取り組もうとしている。	表現したい作品の内容や雰囲気に応じたアングルを設定し、効果的な構図にしている。	①人工物の直線・曲線や、明暗・テクスチャーの違いを表現している。 ②建築物や周囲の空間の広がりなどを表現している。	①作者の表現意図を感じ、社会や生活における美術の役割を理解している。 ②既存の作品のよさを自分の作品の制作に活用している。

(4) 単元（題材）の指導計画(10 時間扱い)

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
第 1・2 時	・ラフスケッチ	・ラフスケッチの役割を学習し、表現の基礎を身に付ける。	ア(観察) イ(ラフスケッチ) ウ②(ラフスケッチ)
第 3・4 時 (本時)	・建築表現 ・透視図法や構図、空間の把握 ・鑑賞及び制作	・建築表現についての参考作品を鑑賞する。 ・ワークシートに記入する。 ・魅力的な作品となるよう描く場所や構図を吟味する。 ・透視図法を用いて、構図の取り方を工夫しながら形	ア(観察) イ(作品) ウ①(作品) エ①(ワークシート)

		体を表現する。	
第5・6・7時	・建築の構造と空間把握 ・明暗や質感	・建築の構造や空間を描き進める。 ・明暗や質感の違いを大まかに表現する。	ア(観察) イ(作品) ウ①(作品)
第8・9時	・作品制作	・作品全体感や統一感を確認し、明暗や質感を詳細に描きこみ、仕上げる。	ア(観察) ウ②(作品) エ②(作品)
第10時	・まとめ	・自己、及びクラスメートの作品を鑑賞する。 ・鑑賞した内容をまとめ、ワークシートに記入する。	ア(観察) エ①(ワークシート)

(5) 本時（全10時間中の第3，4時間目）

ア 本時の目標

- (ア) 絵画などで表現された建築の美しさを理解する。
- (イ) 現代における建築の平面表現の役割について理解する。
- (ウ) デッサンの構図の設定や制作手順を理解する。

イ 本時の展開

段階	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	・本時の学習内容の説明を聞く。		ア(観察)
展開①	15分	・プロジェクターで参考作品を鑑賞し、授業者の説明を聞きながらワークシートに記入する。 ・平面の建築表現の作品と変遷について学習する。 ・現代社会で用いられる建築表現（建築パースなど）が、経済活動に用いられることを学習する。	・本来は人間が構造物として使う建築を平面として表現し、芸術活動として表現の楽しさを味わったり、その美しさを鑑賞したりするようになったことを指導する。 ・作品を鑑賞することが、生活を彩り、豊かにすることを気付かせる。 ・美術の創造活動が進路や就職及び生活と関連があることに気付かせる。	ア(観察) エ①(ワークシート)
展開②	10分	・提示された具体的制作手順、制作条件の説明を聞きながら、ワークシートに記入する。 ・校舎の設計者や、設計の理念について学習する。 ・立体・空間の表現のための透視図法について学習する。 ・フレームの概念を用いた構図の設定を学習する。	・普段使用している建築物の設計者や設計理念、特徴などを理解することで題材への興味・関心を高めさせる。 ・本題材では製図技法については深入りせず、アングルと構図によって必要な消失点を設定することでより正確な表現ができることを指導する。 ・モチーフの大きさによって遠近感や消失点の位置が変わることを板書で示して具体的に理解させる。	ア(観察・ワークシート)

			・構図の決定の際、モチーフをフレームに当てはめて見ることが有効であることに気付かせる。 ・制作場所は、通行の妨げにならない場所を選ばせる。	
展開③	50分	・材料・用具を準備し、制作に入る。 ・アングルや構図を考え、描く場所を決定する。 ・作品の全体感を大切にし、画面の大まかな構図を決定する。	・表現したいイメージや、魅力的な表現とするための構図や描く場所を吟味させる。 ・アングルや構図に応じて、適切に消失点を定めているか注意する。 ・長い直線や、美しい曲線を描くためには、鉛筆の上を軽く持ち、腕全体を使って線を描くよう指導する。	ア（観察） イ（作品） ウ②（作品）
まとめ	10分	・授業シート記入 ・作品を教室後方作品棚に提出		ア（観察）

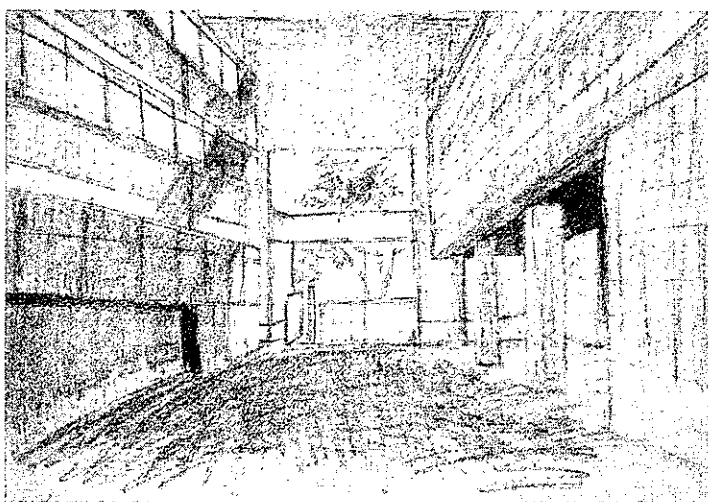
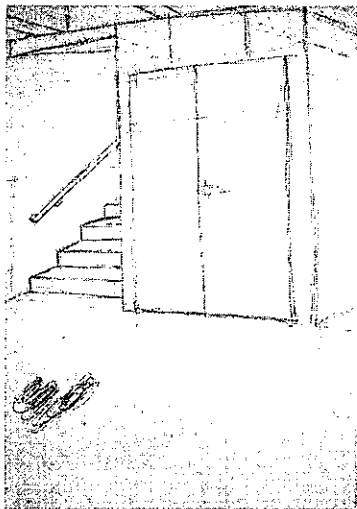
(6) 本時の振り返り

- ア 前時では、鑑賞及び透視図法の指導は行わず、生徒に自ら考えて制作をさせたため、空間と構造の表現に苦勞していた。本時では、平面で表現された建築の美しさを学ぶため、建築が描かれた宗教画、建築を主題とする風景画を鑑賞するとともに、透視図法が用いられている建築パースを鑑賞した。それにより、多くの生徒に透視図法を活用した魅力的な表現の工夫が見られた（参考資料 生徒作品参照）。
- イ 生徒は、大きな画面に長い直線を描くことや、細かく分割された窓や階段、柱などの要素が入る表現などに難しさを感じている。しかし、制作中の個別指導において平面図や、簡略化した空間に直して改めて指導するとほとんどの生徒は理解できるので、技術的なつまづきを解消する丁寧な指導を制作中に継続する必要がある。
- ウ 簡易な紙製の枠を配布し、構図の取り方を指導することで、画面に対する構図の取り方に関しては、一様に上達が見られた。
- エ 今回の授業では、鑑賞が多くの生徒にとって制作の参考となり、生活や心を豊かにすることができた（参考資料 授業後の生徒によるアンケート参照）。しかし、鑑賞と将来の進路や就職、仕事を結び付けるためには美術や作品、及び自己についての長く、深い思考が必要である。題材の導入時以外にも制作の進行に応じた鑑賞の指導を行い、鑑賞した内容と制作した作品について振り返り、美術と社会、生活、そして自己がどのように結び付くかについて考察するなど、美術の創造活動を通して考える機会と時間を設定することが重要である。それは将来、社会の一員として生きていく生徒が、個人的な生活や心の満足だけでなく、人々が相互に理解し尊重し合える多様性に満ちた心豊かな社会を形成するために必要な美術の働きを理解するとともに、生涯にわたって美術を愛好する心情を育む基礎となるものである。

参考資料

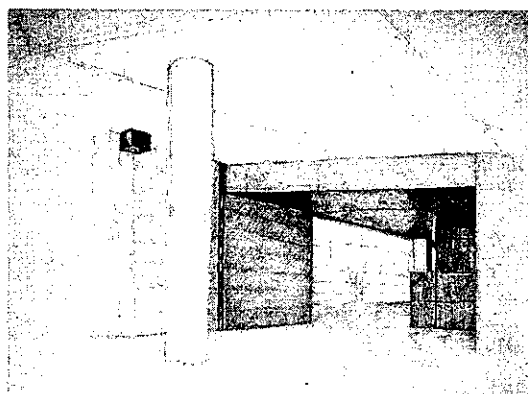
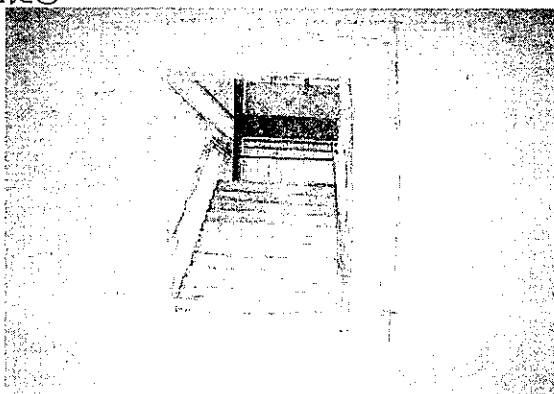
＜生徒作品（左：鑑賞前、2時間制作 右：本時の鑑賞後、3時間制作）＞

生徒①



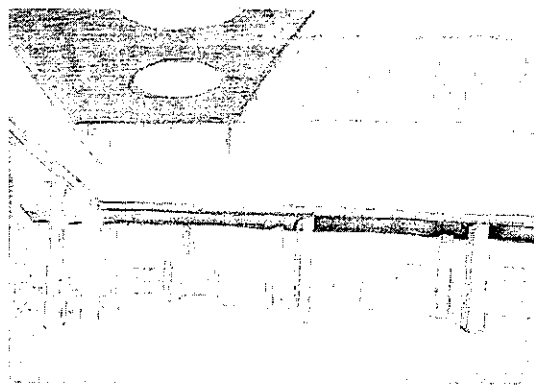
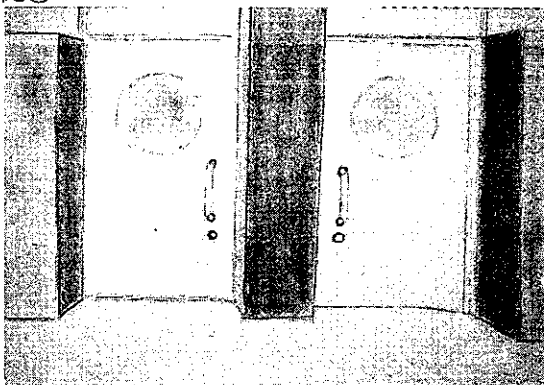
- ・前時にはあいまいな構図や空間のまま表現していたが、本時の指導を受けて構図の取り方、遠近感の表現など、鑑賞したときに魅力を感じる表現に取り組んでいる。

生徒②



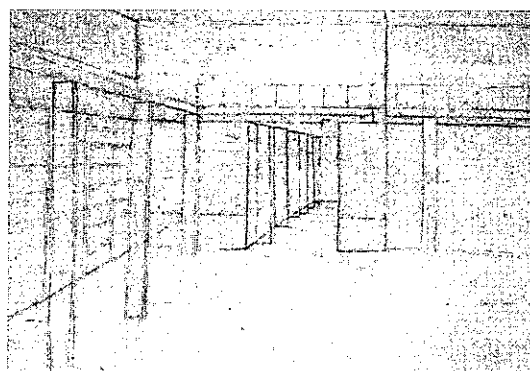
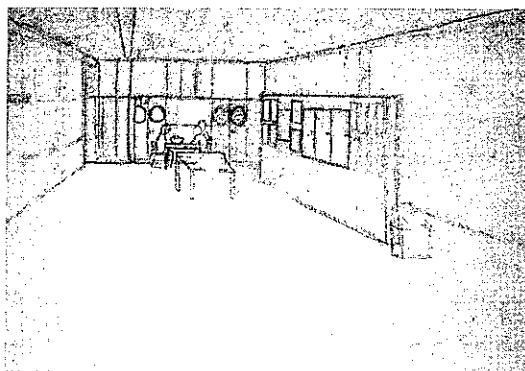
- ・部分的に集中して描いていたものが、本時の指導を受けて水平や奥行の広がり表現の魅力に気付き、空間全体を表現しようとしている。

生徒③



- ・前時には制作意欲に乏しく、単調な作品だったが、複雑な構造と空間による魅力的な表現に積極的に取り組んでいる。

生徒④



・構図の取り方と、奥まって圧縮されて見える部分の空間把握にとまどっていたが、本時ではモチーフに遠近法の理論を当てはめ、消失点を定めて長い直線により構造と空間を表現している。

<授業後の生徒によるアンケート>

- ・鑑賞の解説が制作の参考になりましたか？

かなり参考になった	やや参考になった	あまり参考に ならなかった	全く参考に ならなかった
4	16	4	1

- ・作品を鑑賞する回数はどのくらいがいいですか？

毎回	2～3回に1回	4～5回に1回	6回に1回かそれ以下
1	13	7	4

- ・美術の授業で作品を鑑賞することが、あなたの生活や心を豊かにすると思いますか？

あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
6	17	2	0

- ・美術の授業で作品を鑑賞することが、あなたの将来の進路や就職、仕事に役立ちますか？

あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
4	14	10	0

5 実践事例Ⅳ

科目名	美術Ⅰ	学年	1 学年
-----	-----	----	------

(1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 「水墨画の制作」

イ 使用教材 「美・創造へ1」 日本文教出版社

図版 a 「雪の中の狩人」(ブリュッセル)

b 「廬山高図」(沈周)

c 「秋冬山水図」(雪舟)

(2) 題材の指導目標

- ・ 水墨画の表現形式の特徴を生かし、工夫して創造的な表現をする。
- ・ 鑑賞を通じて日本美術の歴史の中で水墨画がどのように描かれてきたのかを学び、自然と美術の関わりや日本の美術文化について理解を深める。

(3) 評価規準

観点 評価	ア 美術への 関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の 評価規準	美術文化に関心をもち、主体的に表現や鑑賞の活動に取り組もうとする。	想像力を働かせて、創造的な表現の構想をしようとしている。	基礎的な技術を身に付け、表現方法を工夫して表している。	美術や美術文化を幅広く理解し、そのよさや美しさを味わっている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①水墨画に感心をもち、その歴史や流れについておおむね理解している。 ②水墨画の表現に意欲的に取り組んでいる。	①表現しようとするモチーフのよさを自ら見付け出し、その魅力や雰囲気スケッチしている。 ②水墨画の余白の意味を理解し、作品画面の全体の構想を練っている。	①墨画の基本的な技術を理解し、自分でその技能を身に付けている。 ②水墨画独特の表現を、自己の作品に創造的に取り入れている。	①我が国の自然環境や歴史の流れの中で生み出された水墨画とその他の作品を比較し、表現の共通点や相違点を見出している。 ②対象作品の造形的なよさや美しさなど、感じ取ったものを言語で表現しようとしている。 ③鑑賞の場面において、自分の考えを他者に伝えたり、他者の考えを共有したりしている。

(4) 単元（題材）の指導計画（10 時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準 (評価方法)
第1・2時	・ 水墨画の使用具、描画の基本	・ 水墨画の用具の扱い方を学ぶ。 ・ 四君子を描きながら基本技法を理解する。	ア①②（観察） ウ①（作品）
第3・4時	・ 水墨画の下準備 ・ デッサン	・ 水墨画にしてみたい題材を見付けて鉛筆デッサンをする。	イ①（観察・作品）

第5・6時 (本時)	・日本における水墨画の歴史 ・水墨画の構想	・水墨画の歴史や作品を視聴覚機材で鑑賞する。 ・日本の水墨画の特徴について、グループ討議をする。 ・鑑賞活動を通じて構図や表現方法を吟味し、作品の習作を行う。	ア①② (観察) ウ② (作品) エ①②③ (ワークシート・観察・発言)
第7・8時	・水墨画の制作	・デッサンを基に、水墨画の作品として表現する。 ・水墨画の基礎的表現方法を活用しながら、自己の作品を完成させる。	ア② (観察) ウ② (観察・作品)
第9・10時	・完成作品の鑑賞 ・自評や他者の作品についてのディスカッション	・自己及び他者の作品を鑑賞し、ワークシートにまとめる。 ・ワークシートをもとに発表、討議を行う。	ウ② (ワークシート・観察・発言)

(5) 本時 (全10時間中の第5・6時間目)

ア 本時の目標

- (ア) 表現方法の違う作品を鑑賞し、その共通点や相違点を見いだす。
- (イ) 水墨画表現の歴史を学ぶ。
- (ウ) 自己の表現方法に工夫を加える。

イ 本時の展開

段階	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	・本時の目標を確認する。 ・本時の活動内容について説明を聞く。	・前時とのつながりを理解するよう指導する。 ・ポイントを明確にする。	
展開①	40分	・鑑賞用ワークシートを受け取り課題を確認する。 ・図版a b c三つの作品を鑑賞し、共通点・相違点・気付いたこと感じたことを各自ワークシートに記入する。 ・ICT資料を見ながら説明を聞く。 ・現代に続く多様な水墨画の作品を鑑賞する。 ・気付いたことをワークシートに記入する。 ・グループごとに自分の考えや	・5分間ワークシート記入を行い、自分の考えをまとめさせる。 ・図版a b cの異なる表現を比較することで、日本の水墨画の特徴に気付かせる。 ・歴史的順序に沿って作品を鑑賞していく中で、時代における美意識や創造活動の背景がどのように変化していったかを考えさせる。 ・水墨画の多様な表現を知ることによって水墨画への理解を深め、自己の表現に関連させて考えるようにする。 ・時間を区切ってディスカッ	エ② (観察・ワークシート) エ① (観察・ワークシート) ア① (ワークシート) エ②③ (発言、ワークシート)

		- 感じ取ったことを話し合い、キーワードを決める。 - リーダーがキーワードを記入し、提出する。	- シヨンし、自他の考えを話し合わせ、水墨画に対する認識を深めさせる。 - グループ討議が円滑に進むよう、必要に応じて指導助言を行う。	
展開②	40分	- 代表者がキーワードについて説明する。 - ワークシートの記入が終了した者から準備をし、習作に入る。 - 前回行ったスケッチをどのように水墨画にするのか構想を練る。 - 習作をまとめ、後片付けをする。	- 各グループのキーワードをホワイトボードに貼り、共有させる。 - 基礎技法練習（四君子、技法）をホワイトボードに貼り、スケッチをどのように水墨画にするか構想させる。 - 机間指導により、構想が十分でない生徒に対し、個別にアドバイスをする。	エ②（発言） ウ②（作品）
まとめ	5分	- アンケートを記入する。 - 今日の授業を振り返り、次回の授業内容を理解する。	本時のまとめと、次回の授業内容について話す。	ア②（観察、ワークシート）

(6) 本時の振り返り

- ア 鑑賞の内容が一方的にならないよう、ワークシートを用意した。そのため、生徒はメモをとることができ、自己の考えをまとめ、より深く水墨画を理解することができた。
- イ 作品の細部の鑑賞や、スケールを感じさせるために、ICT機器を利用した。効果的に活用できた部分もあるが、生徒の反応から、作品数や構成が更に工夫できると感じた。
- ウ 表現を比較するため使用した図版 a・b・c は、全て山景を表現したものだが、それぞれ描いた人物の国が違っている。c は比較的認知度が高く、日本の水墨画の表現例としてふさわしいと考えて取り入れた。この3作品の選択について、a が油彩であったため他の2作品との比較が難しかったことが、ワークシートから読み取れる。b と c は水墨画であり、筆の運びや余白、墨の色の違いなどよく観察ができていた。
- エ 水墨画の基本技法については、復習として設定したが、授業後のアンケートからは、実技練習時はしっかり認識できていなかったものが、本時の鑑賞を通して技法とその用法が整理され、自己の作品にどのように活用すべきか考えるのに役立っていることが分かった。また、「授業で一番印象に残ったものは」という問いに、水墨画の歴史が多く挙げられるなど、生徒は、絵が描かれた背景などに興味をもっていた。さらに、現代のCMの中に使われている水墨画を映像で鑑賞したことも、より水墨画に親しみをもつきっかけとなった。
- オ 「日本の水墨画の特徴について」というテーマで、グループ討議をし、代表が発表した。アンケートには、討議自体が楽しかったというものや、友達の意見に感心したとあり、美術の授業でも、言語活動を取り入れることが大切であることを再認識した。

11 まず3つの絵を比べながら各自で記入しなさい。



題名 _____

作者名 _____

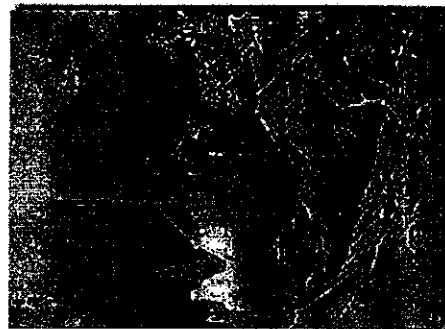
特徴や感じたこと _____



題名 _____

作者名 _____

特微や感じたこと _____



題名 _____
作者名 _____
録微や感じたこと _____

2 日本の水墨画の特徴について話し合い記入しましょう。

↑

江 一 D 廿

3 説明を聞きながら記入しよう。

① ① 水墨画を描くのに必要な道具は？

- 硯 ……() にあった硯を遊ぶ。(例、硬い硯には固い墨)
- () ……良質のものは伸びがよく、発色がよい。原料の炭によって()が変わる。()、茶墨、紫墨などがある。
- 筆 ……用途別に大小、長短がある。しまう時は、根元まで良く荒い、布巾などで水気を切り()を整える。
- 紙 ……紙は描法で遊ぶ。ドーサが引いてある()にはじまない。
- その他 ……必要に応じて筆巻き、筆洗(ひっせん)、布巾、絵皿、下敷き、水差し、等が必要である。

②水墨画の主な技法

技 法	技 法 名	内 容
鈍鋸法 (こよろくほう)		()
咬骨法 (もっこつほう)		()
湯釜法 (かっぱいほう)		釜の水分を少なくしてかすれるように描く
酒釜法 (じゅんびつほう)		釜に水分を含ませ懸液をつけて描く
たらしこみ法		()

※基礎は蘭・竹・菊・梅の（ ）を描き練習された。

③水壘圖の歴史

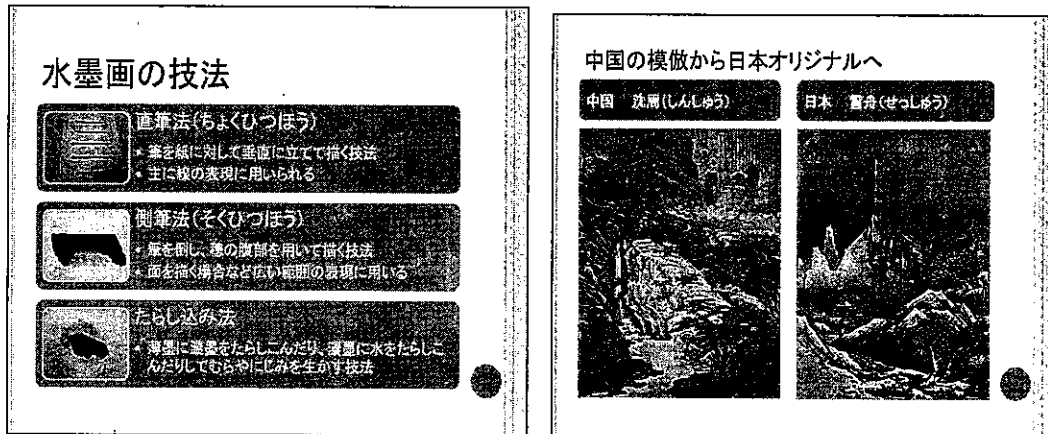
水墨画の歴史は（ 世紀～ 世紀）に日本と（ ）の間に禅僧の往来が盛んになったことにより、新しい様式の絵画がもたらされたことにはじまる。禅宗では師匠から弟子へ仏法を伝えたことを証明するため（ ）と呼ばれる僧侶の肖像画が描かれた。

() 時代になると、足利家が禪宗を庇護し、() という参を指く僧侶が現れた。この時代には如拙〔じょせつ〕周文〔しゅうぶん〕喬舟〔せしゅう〕などが活躍する。その中で如拙の描いた() は「羅漢で鞍をおさえることができるか」という() 第4代將軍足利義持〔あしかがよしもち〕。このひとつであり、明らかに知的な遊びのひとつで、水園も日本独自の表現に変化していく。禪宗のように無駄を省き、自己が無くなって情景やものを描く姿勢が生まれてくる。

桃山時代に入ると、水墨画の国産といわれる（ ）を描いた長谷川等伯〔はせがわとうはく〕が台頭してくる。彼は当時主流だった狩野派と対立しながらも、名作を時代の中に残していた。

<使用したプレゼンテーションソフト>

水墨画の技法や、作品の比較がしやすいように設定した。



VI 研究の成果

本研究では、生涯にわたり美術を愛好する心情を育てることを目標とし、主体的に創造活動に取り組むためには鑑賞活動が大きな役割をもつという考えに立ち、具体的な指導方法を開発するとともに、鑑賞を取り入れた検証授業を様々な角度から行った。

本を制作するという授業においては、多くの既成の絵本を鑑賞することで制作のヒントを得るとともに世界各国の文化に触れたり、絵巻物を鑑賞して日本の古典に触れたりする機会を設ける試みを行った。生徒は多くの作品に触れて様々な表現方法を学ぶとともに、同じ「絵本」という表現媒体であっても作品や作者の時代や民族によって異なる表現文化を感じとり、美的体験を深めると同時に美術に関する興味・関心を大いに高められた。

版画の授業においては、映像作品の鑑賞を効果的に取り入れ、エッチングによるモノクロームの心象表現のイメージを深める指導を試みた。鑑賞前後の作品を比べてみると、心の世界を鉛筆の濃淡で表現したり、人物から伸びる影による時間の表現や人物と背景の大きさの対比による心情の表現などを場面ごとに表現したりするなど、内面の変化をみることができた。

建築デッサンの授業においては、パースペクティブの技法説明の際に建築物が遠近法で描かれる作品をルネサンス以降の時代を追って鑑賞したり、建築パース等現代の経済社会の場面で使用される透視図を見せたりするなどして、校内風景素描の内容の向上を試みた。生徒は作品のよさや美しさ、美術の歴史を知ることによって美的体験を深め、学習内容と生活及び社会を関連付ける創造的思考を育むことができた。

また、絵画の授業において、日本古来の絵画技法である水墨画を取り上げ、我が国の伝統的な美術の表現の特質や様式、日本及び諸外国の絵画についての理解を深めることにより、形式的な水墨画の技術習得に終わらせることなく、生徒の美意識を深め、創造意欲を高めるよう試みた。その結果、水墨画に対する生徒の見方が深まり、作品制作に当たっても、日本の伝統的な水墨画のよさを意識したり、自己の表現にうまく取り込んだりするようになった。

このように、鑑賞の授業を意図的・計画的に実施したことにより、生徒は作品を構想する祭や制作過程においてモチベーションを高め、作品内容を向上させ、達成感を増やすことができた。

このことは、本部会で主題とした「生涯にわたり美術を愛好する心情」を育むことにつながったと考える。

さらに、鑑賞授業では、生徒による話合いの場面設定をして意見交換をさせたり、ワークシート等を活用したりするなどして言語による感想内容の確認を行い、生徒の言語活動の成長をも促すものになるよう工夫した。その結果、話合いをまとめたワークシートやアンケート等から、生徒がお互いを理解し、自分と異なる様々な見方や感じ方に目を向ける機会が増えるとともに、作品に対する理解も深めていることが分かった。また、他者の意見などを参考にしながら自己の表現活動に生かしていることが分かった。

VII 今後の課題

1 鑑賞指導の時期と内容

現代の高校生は、これほどの情報化社会に置かれながら芸術作品に触れる機会が非常に少なく、また特定の作品等に偏っていることから、できる限り多くの美術作品を見せ、美的体験を豊かにしたいと考えた。

新しい学習指導要領の中で、鑑賞教育の必要性は強調されているが、その取扱いの適切な時期については、考察を深める必要がある。発達段階におけるどの時期に、あるいは年間計画のどの時期に、また一つの単元におけるどの時期に、どのような作品をどのように見せるべきかがポイントとなる。表現活動を高めるための鑑賞活動において、鑑賞の時期及び素材は精査し、適切に設定しなければならない。

今後もこの点において研究を重ね、効果的な指導法を工夫していく必要がある。

2 言語活動の充実

鑑賞授業において、まず感想を言葉にすることは非常に重要である。言語活動が感想を明確にし、ひいては鑑賞内容を深めることができる。しかし、ただ感想を書くことのみが鑑賞活動ではない。生徒にとってそこに意味を見いだし、深い学びにつながることが重要である。

そのため、ワークシートなど言語化の教材を研究し、開発する必要がある。

3 各学校段階の内容の連続性

今回の教育研究員の宿泊研修会において小中学校美術部会との交流を通して、私たち高等学校美術教員が小・中学校の美術の教科書をほとんど見たことがないということを改めて自覚した。知識や技法について、中学までの習得程度をよく知り、それを土台として指導を計画していく重要性を認識した。新しい学習指導要領でも、各学校段階の内容の連続性に配慮することに触れている。

今後は、小・中学校の美術の教科書を研究するとともに中学校の研究授業等に参加し、指導方法などの研修を深めることも重要である。

平成23年度 教育研究員名簿

高等学校・芸術（美術）

学校名	課程	職名	氏名
都立久留米西高等学校	全日制	主任教諭	○太田 佳子
都立町田高等学校	全日制	主任教諭	那知上 哲子
都立芦花高等学校	全日制	主任教諭	尾関 裕隆
都立大山高等学校	全日制	教諭	旭 仁也

○ 世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
統括指導主事 鵜飼 敦之

平成 23 年度

教育研究員研究報告書

高等学校 芸術

東京都教育委員会印刷物登録

平成 23 年度第 181 号

平成 24 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

電話番号 (03) 5320-6836

印刷会社 有限会社 シーダー企画